

普段からあいさつして おいて、よかった…

栃木県 女性



3年前に結婚し、夫の実家の敷地内に新居を建て暮らしています。2歳になる娘を保育園へ預け、フルタイムで仕事をしている私は、普段から地域の行事や付き合い事は夫の両親に頼りっぱなしでしたので、ご近所の方の名前も顔もうろ覚えでした。

その日は、朝から雨が降り続き、午後には雨脚を強め豪雨になりました。自治体の防災メールが届き、近くの河川の水位の上昇により避難勧告の情報が入りました。

夫は休日出勤で、一人で何を準備しているのか分からずにいると、お昼寝をしていた娘が目を覚まし泣き始めました。娘を抱っこしてあやしているうちに時間が過ぎていきました。私一人ならまだしも、小さな子供を連れて避難できる状態ではない。とにかく2人で2階へ上がりました。

夫の両親も出かけており、頼れる人は誰もいません。孤独感に襲われ、さらに強くなる雨風に不安が増していました。

その時、インターホンが鳴りました。夫が帰宅したと思い、急いで玄関のドアを開けると、そこには見覚えのある女性が立っていました。そして「何しているの！早く避難しなさい！！」と怒鳴るのです。一瞬、呆気にとられました。すぐに言葉が出てきて「でも！娘が起きちゃって…何も準備できてなくて…何を…持って行って…いいのか…分からなくて…」だんだん涙声になるのが自分でもわかりました。女性は「失礼するわよ」と家に上がり込み、

「さあ、おばちゃんと一緒にいこうね」と娘を抱くと「まず、この子の必要なものを用意して！」と、その女性は次々と必要なものを指示してくれました。言われるがまま夢中で動いていたのと、誰かがいてくれるという安心感が持てたため不安な気持ちは少なくなっていました。準備ができると「さあ行くわよ」と荷物と一緒に私と娘を車に乗せてくれました。正直、避難場所もどこか知らなかったのととても助かりました。

避難所へ向かう途中少し会話ができ、その女性は夫の母の知人であり、近所に住んでいることを知りました。何度か夫の実家の庭先で挨拶したことがありました。夫の両親が出かけていることを知っていて、私達のことが気になり様子を見に来たら、案の定、まだ避難していないと分かり慌ててインターホンを鳴らしたと言います。

無事に避難所に着いた頃、我が家付近一帯は河川の氾濫により浸水し始めました。あの女性が来てくれなかったら、私と娘は今頃どうなっていたのかと想像するだけでぞっとしました。

あの女性は私達の命の恩人です。会話をしたことはなかったけど、挨拶だけはしておいてよかったと思いました。でも、これからは、地域の人と挨拶だけでなく、世間話の一つぐらいは交わそうと思います。そして、今度は私が誰かを助けることができるようになりたいです。



てんでんこの教え

- 自助 -

岩手県 男性

東北地方の三陸海岸は、過去いくどとなく津波におそわれ、そのたびに大勢の人の命が失われ、家が破壊されるなど、大きな被害を受けてきました。そうした経験の中から生まれたのが、「てんでんこ」という言い伝えです。

これは、津波が来たら、他人をかまわず、てんでんこに一生懸命逃げなさいという意味です。いざとなったら、友達や家族でさえかえりみず、自分の命は自分で守りなさいという教えは、自分さえ助ければ他の人はどうなってもよいという利己主義的な考え方のように聞こえます。

しかし、そうではありません。かつて「家」が大事にされていた時代には、家族のうち一人でも助かれば、「家」は絶えずにすむと思った人も多かったでしょう。そして今日、この言い伝えは、新しい意味をふきこまれています。

「てんでんこ」は、小学生や中学生に、自分で判断して自分で行動しなさいという意味だと教えられました。津波が来た時にはどう避難するかを普段からしっかり頭に入れておいて、いざというときには一人ひとりが率先して高台に逃げる。それを知っている家族は、学校にいる子どもたちはきっと無事に逃げているはずだと信じて、自分たちの避難を考えることができます。この自分の身は自分で守るという「自助」の考え方が、多くの命を救っています。

